

種を播いてみよう

カノコユリは、7月～8月に花を咲かせ、9月～10月に莢が肥大、11月に成熟して種子が飛散します。種を播く場合は、11月になって莢が開き始めるころに莢ごと取り、日陰に干し中の種をとりだします。種には充実して胚乳がある種と未成熟で胚乳がない種があるので、未成熟の種を除きます。

収穫した種は休眠状態で、夏の高温を経ないと発芽してきません。自然状態では、種を採った1年後に地中で発芽しますが、地上に葉が出てくるのはさらに半年たった春になります。このため、採取した種の発芽を1年間早める方法として、人工的に夏の高温状態におく温度処理を行うと2～3か月後に発芽し、1年間発芽を早めることができます。

温度処理の方法

- ① 11月下旬頃から温度処理を始めます。種が発芽するには水分が必要なため、種に種の量の3倍のパーミキュライトと、種と同量の水を加えて混ぜビニール袋に入れます。
- ② 処理する温度と期間は次の通りです。35℃に2週間、その後25℃に置くと4週間ほどで発芽が始まります。発芽が揃うまでさらに4週間置くと、ほぼ発芽してマッチの頭くらいの大きさの小さな球根ができます。温度処理は、市販の恒温器を用いるか、自宅にあるもので代用します。電気座布団か電気アンカ、ハッポースチロール箱、それに温度調節用のサーモスタットがあればできます。



カノコユリの種子の高温処理準備



種子の温度処理

高温処理35度2週間
→ 25度8週間



採取した種子と高温処理により休眠がやぶれ発根した種子(2月)



③ この小球根はまたすぐに休眠します。この休眠を破るため10℃くらいの低温に6週間ほど置く必要がありますが、11月下旬から温度処理を始めると2月には発芽(小球根の発生)が揃います。2月は低温期なので、低温処理は行わずに小球根を庭や鉢等まき、自然低温に合わせます。

鉢やプランターの場合は、鹿沼土1・赤玉土1・腐葉土0.5を混ぜた用土に播き、種が見えなくなる程度の覆土をして半日陰の場所に置きます。



種を箸で5列×5列(25個)に並べる



種が見えなくなるように覆土をする



発芽状況(5月2日)



3年生:3月25日

3年生



3年生:7月22日

④ 種を播いた鉢は、午前中は日が当たるが、午後は日陰になる所に置きます。

⑤ 4月に幅5～6mm・長さ5cmほどの細長い葉が1枚出てきますが、この葉は7月から8月の高温期には枯れ、地中に1g程度の小球根が残ります。中には、2枚目の葉を出すものがあります。

⑥ 肥料は、1・2年目には特に必要ありません。3年目には液肥か、低度化成肥料等を少し施します。

⑦ 2年目の10月～11月に堀上げ、大きさ別に分けて再度植込むと、2年後には花が咲きます。生育条件がいいと種を播いて3年目に花が咲きますが、大部分の開花は4年目になります。